BREAKING THE LAW

ブレイキング・ザ・ロウ

Words & Music by G. Tipton, R. Halford and K.K. Downing

'80年に発表された『ブリティッシュ・スティール』のオープニング・ナンバー。ヴォーカルは、全体的に音域が低いのでラクに歌えるだろう。◎田団は、メロディーを若干フェイクさせるとよいだろう。この部分ではコーラスもフェイク気味なので、ヴォーカリストとのコンビネーションに注意すること。匣でのフェイクもあまり符割りにこだわらずに。ギターだが、Introでのフレーズは、表情をつけずにプレイするとよい。△□等では、1度と5度の音を使ったコードでプレイされている。◎でのリズム・アクセントは、他の楽器とユニゾンなので気をつけること。匣の5小節目からは、効果音的なギターが2本入っている。まず、ボトルネックを使ってゆつくりとグリス・アップしていくギター。もう1

つは、アームを3連のリズムで大きくダウンさせ、パトカーのサイレンのような音を出しているギター。ギターが2人いるバンドは、是非チャレンジしてみてほしい。図からギターIは、Introのフレーズをオクターヴでプレイしている。ここでもできるだけ、表情をつけずにプレイするように。ドラムスとベースは8ビートのシンプルな曲だが、曲の後半でよく出てくるシンコペーションには注意。お互いのシンコペーションのノリが違っていると、結構カッコ悪く聴こえてしまったりする。シンコペーションは、する時よりもした後の方が大事で、シンコペーションした後の小節の2拍目を合わせる感じでプレイすると良い。



© Copyright 1980 by CREWGLEN LTD./EBONYTREE LTD./GEARGATE LTD./EMI APRIL MUSIC, INC. Rights for Japan controlled by Shinko Music Publishing Co., Ltd., Tokyo Authorized for sale in Japan only













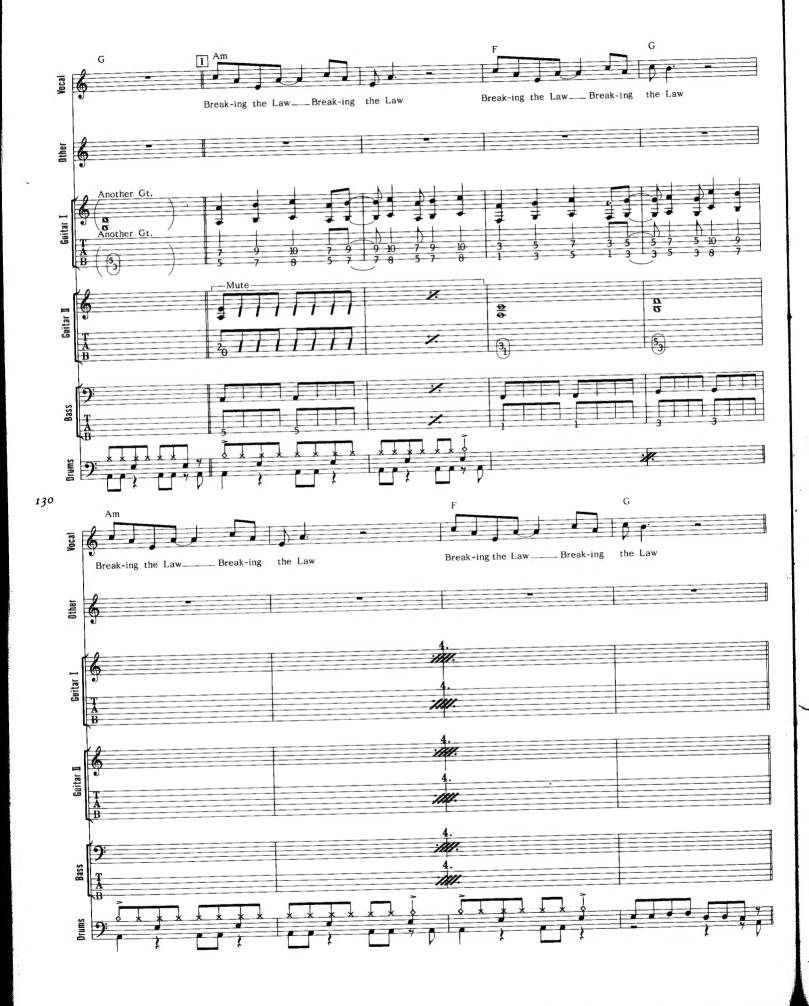






_









FREEWHEEL BURNING

ホイール・バーニング

Words & Music by G.TIPTON/R.HALFORD/K.K.DOWNING

ジューダス・サウンドのひとつの頂点を極めたとも言えるアルバム「背徳の掟」に収録されていたドラマティックなナンバー。ボーカルは最初から最後までハイ・パワーなシャウト・スタイルで押し通している。かなり音域が高めだが全力を込めて歌うように心がけよう。

スピーディーなギターのリフ・ワークもこの曲の大きな魅力のひとつだ。2本のギターの絡みでひとつのリフ・パターンをつくり出すという彼らの方法論も完成の域に達した感がある。しかもこの曲などでは1曲で中にいくつもの違ったリフ・パターンが出てくるので、曲の構成とそれぞれのパートをしっかりと頭の中に

入れておくことが必要だと言えるだろう。

ギター・ソロ田田では低音弦をブリッジ・ミュートした状態での速弾きと、ピッキング・ハーモニクスを上手くキメることがポイントになっている。回忆ではそれぞれ途中からツイン・リード、トリプル・リードになるが、回はギターIのオクターブ下、区の方はギターIIのオクターブ上の音で弾いているので、ギター2人のバンドで演奏する場合はオクターバーやピッチ・シフターなどを活用するのも良いだろう。

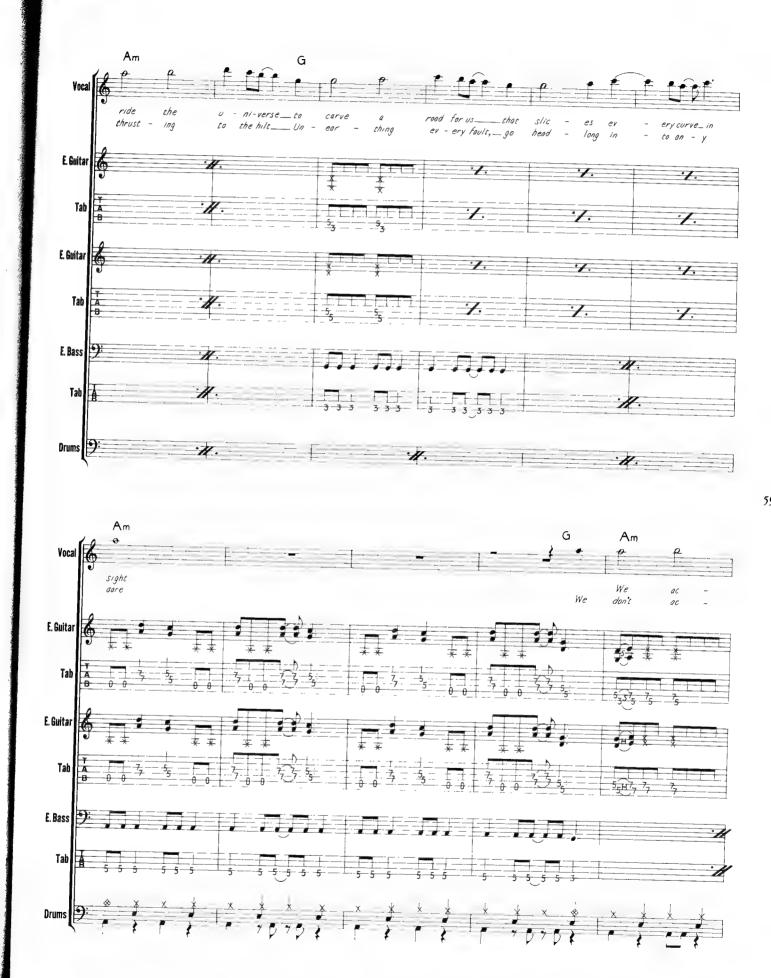
リズム・セクションは典型的なHR/HMタイプのタテンウ・ ビートでパワフルな疾走感を出せるように頑張ってプレイしょう。



© Copyright 1983 by CREWGLEN LTD. EBONYTREE LTD. GEARGATE LTD. ZEMI APRIL MUSIC, INC. Rights for Japan controlled by Shinko Music Publishing Co., Ltd., Tokyo Authorized for sale in Japan only











G

 A_m

































Tab









K Am

<Gt.皿>

Vocal 6



G













HELL BENT FOR LEATHER

殺戮の聖典

Words & Music by G.TIPTON

5枚めのアルバム「殺人機械」からのピック・アップ・ナンバーで、78年に発表された作品ながら現在でも充分に通用するハードなサウンドを持った曲だ。

ボーカルは前半はやや抑えめにして、特に同日ではオリジナルのメロディーを生かすように歌うこと。後半からは少しずつ盛り上げていって区で一気に爆発させるようなつもりで全体をまとめよう。

イントロで使われているSEは、おそらくキーボード・シンセによるものだろう。音程感がほとんど無いので、強力なフランジャーか何かで代用してみるのも面白いだろう。

ギターは、ソロ、バッキング共にそれ程複雑なツイン・ギター

の絡みは見られないが、レフ・ワークでは彼らならではのリフ・ メイクに対するこだわりが見られるのが興味深い。

回、回などのリフ・パターンではシングル・ノートとダブル・トーンの組み合せやハンマリング、プリングを使うことによって独特のウネリを持ったパターンに仕上げている。両手のミュートに注意して、変なノイズを出さないようにプレイしよう。

ギター・ソロ回はオーソドックスなタイプのライト・ハンド・ プレイで、両手のポジション移動を正確にすることがキメ手となるフレーズだ。

総合的には、全パートともややつっこみ気味のタイミングでスピード感が出せるように心がけプレイすると良いだろう。



© Copyright 1978 by CREWGLEN LTD. /EMI APRIL MUSIC, INC. Rights for Japan controlled by Shinko Music Publishing Co., Ltd., Tokyo Authorized for sale in Japan only





Tab 3

Drums S



Drums 2













E. Bass 2

Tab

Drums 🦭



















HELLION~ELECTRIC EYE

ヘリオン〜エレクトリック・アイ

Words & Music by G.TIPTON/R.HALFORD/K.K.DOWNING

彼らの人気を名実共に動かしがたいものにしたアルバム「復讐 の叫び」のオープニング・ナンバーだ。

「ヘリオン」はスロー・テンポのインストゥルメンタル・ナンバーで、3本のギターガダビングで重ねられている。リード・パートでの大きめのビブラートを生かすことガポイントだ。

そして、テンポ・チェンジと共にスピーディーな「エレクトリック・アイ」に突入する。ボーカル・パートには様々なエフェクト処理によってかなりカラフルな印象を持っているが、ライブなどではストレートに歌いこなすように心がけよう。

ギター・パートでは、8分音符のシンコペーションを生かした

スピード感に満ちたリフ・ワークがこの曲でのひとつのポイントになる。かなりハイ・テンポだがダウン・ピッキングを中心に、切り込んでいく様な感じを出してプレイしよう。

回からのギター・ソロは強めのピッキングで何よりも勢いを大切に弾くことが大切だ。回の5~6小節のライト・ハンド奏法のフレーズは各拍のアタマの音が右手でタッピングする音だ。途中に右手の効果音的なスライドが出てくるところでリズムが狂ってしまわない様に気をつけよう。

リズム・セクションはシンコペーションのタイミングに注意してプレイすることを心がけておこう。



© Copyright 1982 by CREWGLEN LTD. EBONYTREE LTD., GEARGATE LTD. EMI APRIL MUSIC, INC. Rights for Japan controlled by Shinko Music Publishing Co., Ltd., Tokyo Authorized for sale in Japan only





E. Guitar

Tab

Em





Drums 9: ***







E. Guitar



 $\mathsf{D}_\mathit{on} \mathsf{E}$

___in prob-ing

GonA Em

Em

G E Em

A on E





Drums Drums

Tab









GonE

E. Guitar

Asus+onE

A on E

GonE Em

DonE Asus4 onE AonE

GonE



Tab

Drums 9:







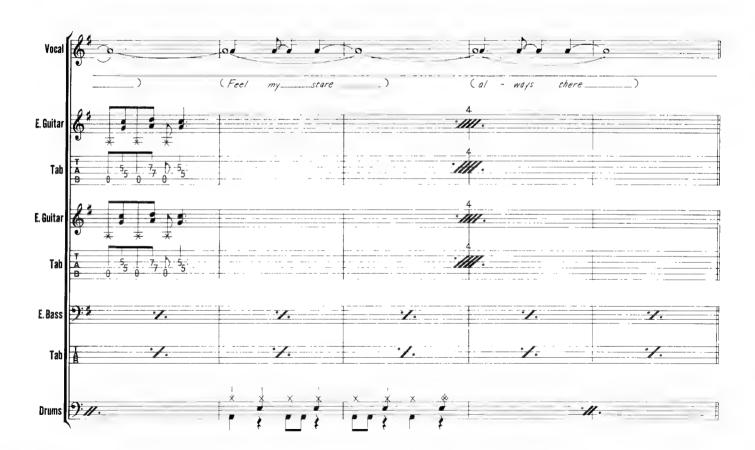




E. Guitar















Drums 9:

LIVING AFTER MIDNIGHT

リヴィング・アフター・ミッドナイト

Words & Music by G. Tipton, R. Halford and K.K. Downing

彼らのライヴには欠かせないポップなノ」のナンバー。ギターのIntroや国でのリフは、ギターIとギターIIのニュアンスが多少違う点に注意。ギターIではコードを中心に弾いているのに対し、ギターIIではルート(根音)と5度の音を使った低音弦を中心に、ベースに近い役割をしている。ギタリストが1人のバンドでは、2本をまとめてコード・ストロークのような形で弾いても良いだろう。匠でのギター・ソロは、短いながらも印象的なフレーズに仕上がっている。3小節目でのピッキング・ハーモニクスだが、ここではチョーキング・アップをしながら行う。チョーキングする時に良く使われるテクニックなので、ここで完璧にマスターレておくと良い。7小節目では、22フレットというギ・ギーのポジション(ギターによっては24フレット等もある)ではあるが、ソ

口の最後なので、思いっ切り良くグリッサンドをして22フレットまでもっていくように。このグリッサンドの良し悪しで、このギター・ソ口の良し悪しが決まると言ってもよい。又、その後のハーフ・チョーキングは、あまり半音を気にせず、軽く持ち上げるような感じで。ベースはミドル・テンポの8ビートなので、オルタネイト(アップ&ダウン)のピッキングで歯切れ良く弾こう。休符もしっかり感じとれば、ウラのレズムも良く出せるだろう。ドラムスは、Introがドラムから始まるので気合いを入れていこう。曲の途中のシンコペーションの前のハイハット・オープンは少しだけ開け、次のシンコペーションのつなぎといった感じで自然になれば良いだろう。



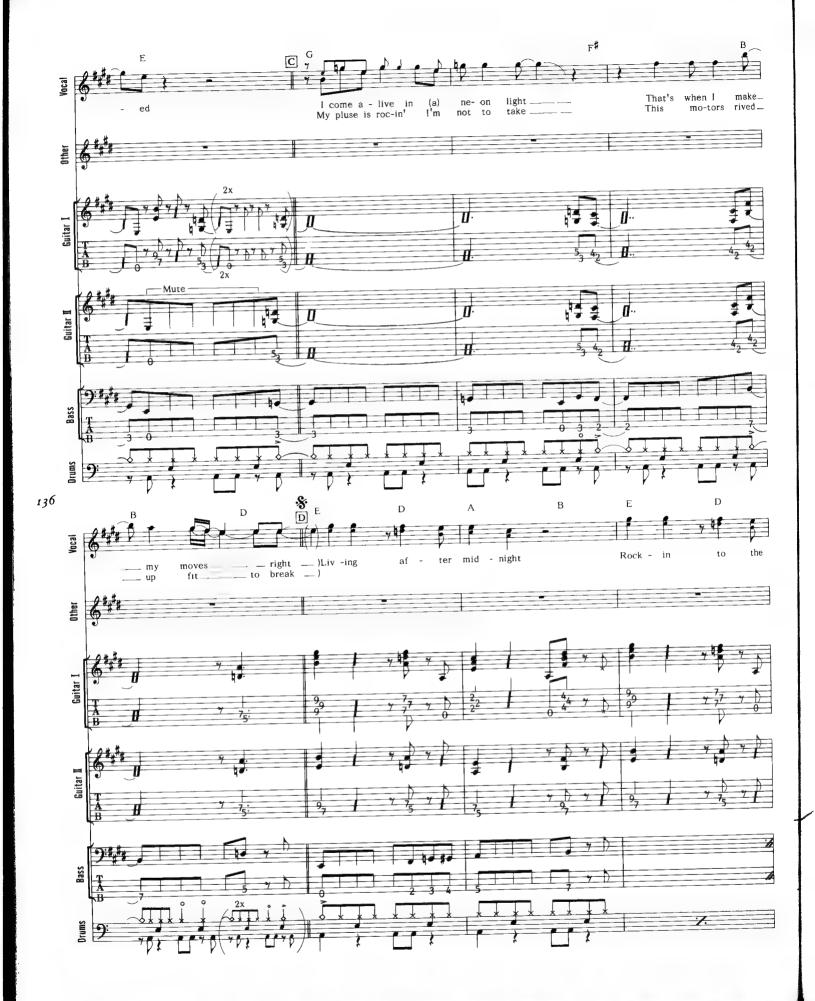
© Copyright 1980 by CREWGLEN LTD. EBONYTREE LTD. GEARGATE LTD. EMI APRIL MUSIC, INC. Rights for Japan controlled by Shinko Music Publishing Co., Ltd., Tokyo Authorized for sale in Japan only





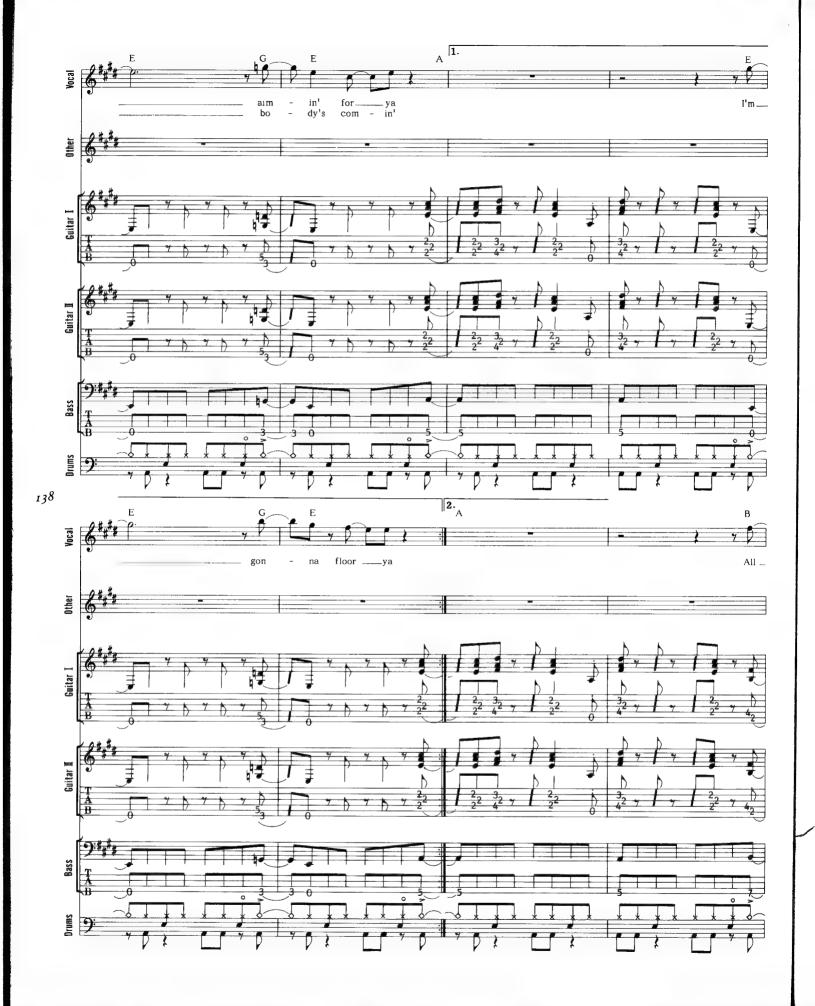






















METAL GODS

メタル・ゴッズ

Words & Music by G.TIPTON/R.HALFORD/K.K.DOWNING

7枚めのアルバム「ブリティッシュ・スティール」に収められていた曲で、彼らのトレード・マークとも言える内容を持つナンバーだ。

ボーカル・メロディーがかなり広い音域にわたっているので、ボーカリストは全体的なバランスに注意してあまりハイ・ノートばかりが目立ってしまわないように注意しよう。

ギター・パートでは、2本のギターによるリフ・パターンのリズムを揃えることが大きなポイントだ。特に16分音符のシンコペーションのタイミングに注意してプレイしよう。[5]のギター I はショート・ディレイをやや深めにかけると近い雰囲気が出せるだろう。

国はギター・ソロ。全体的に非常にラフな感じのプレイなので、 あまりきちんとした正確さはこの曲の場合それ程気にしなくても 良いだろう。

エンディングでは、旧からリフの形が一部変わっているので注意すること。正確なオルタネイト・ピッキングを生かしてリズミックにプレイすることを心がけよう。

ベースは強めのピッキングでひとつひとつの音をハッキリと聴かせられるように弾いてほしい。ドラムスはレコードではハイ・ハットの刻みがややハネて聴こえるが、これは手クセ的なものなのでそれ程シビアに考える必要はないだろう。



C Copyright 1980 by CREWGLEN LTD. EBONYTREE LTD. GEARGATE LTD. EMI APRIL MUSIC, INC. Rights for Japan controlled by Shinko Music Publishing Co., Ltd., Tokyo Authorized for sale in Japan only











Vocal 6

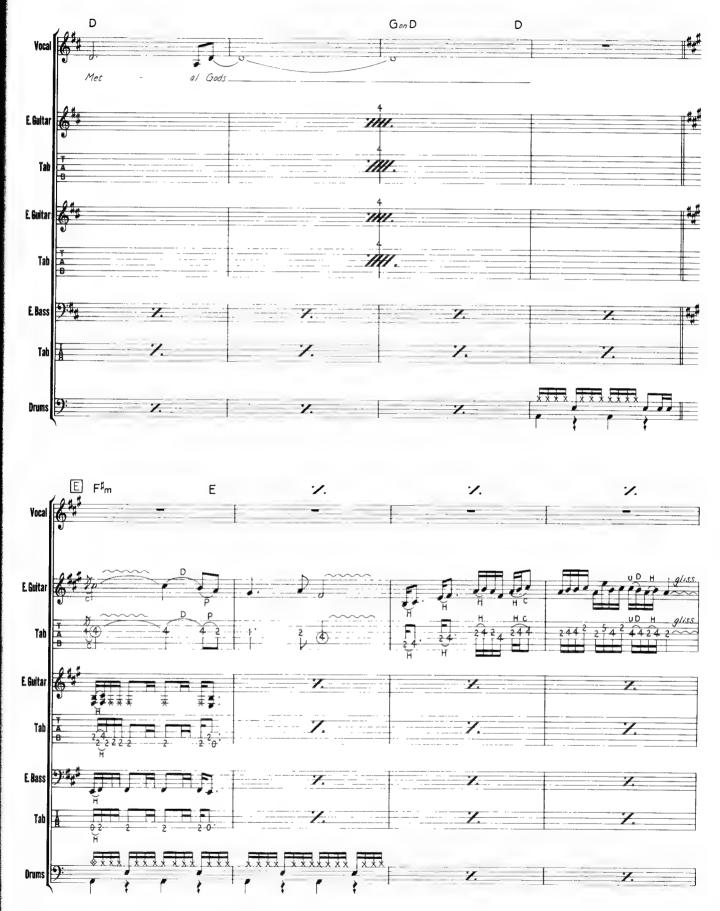
E. Guitar



Ε

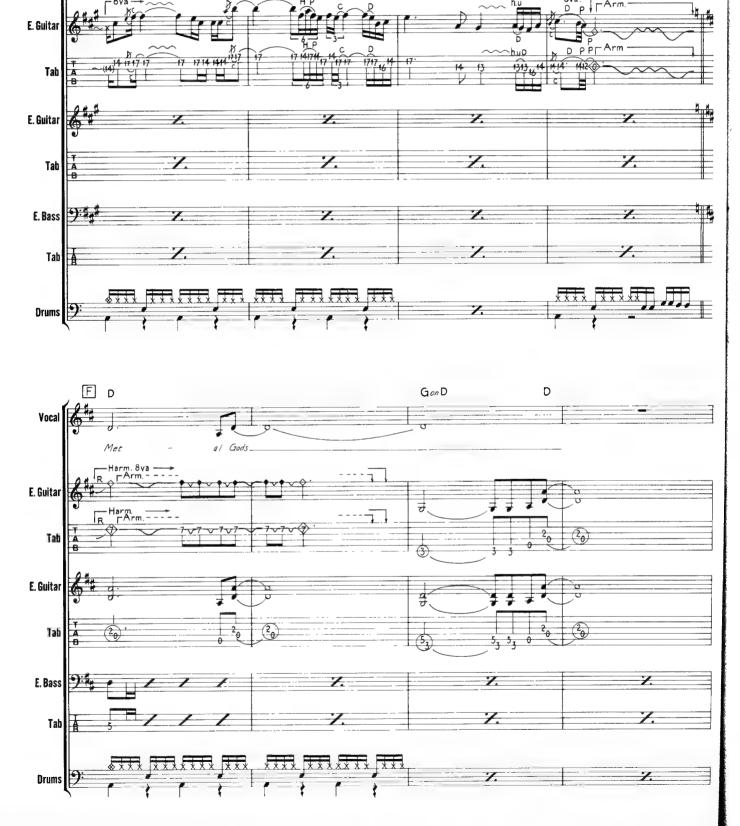
Reaped by ro-bot scythes.





曹





·/.

٧.

%.

1.

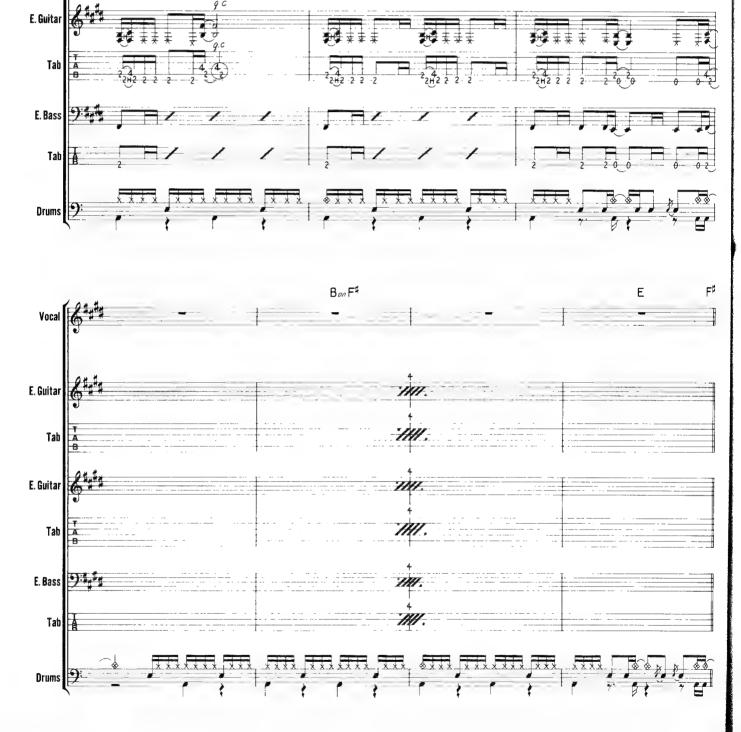




#

围





BonF#

Vocal **

E. Guitar

Tab





F#



Drums 2



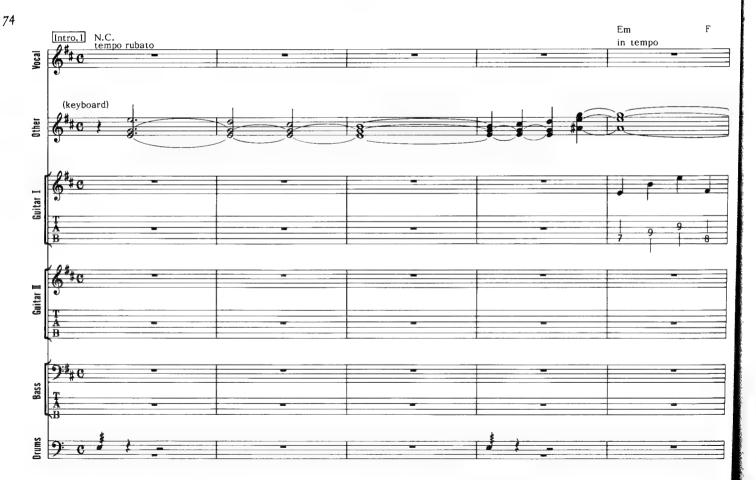
NIGHT CRAWLER

ナイト・クローラー

Words & Music by G.Tipton, R.Halford and K.K.Downing

「運命の翼」の頃の雰囲気さえも感じさせるナンバーで、ヴォーカルは、メロディーが大きいので多少ラクではあるが、歯切れ良く歌うこと。ギターはIntroでは、テンポ・フリーのシンセに絡んでアルペジオがフェイド・インしてくる。曲のテンポの鍵を握るので注意しよう。Intro 2のギターIのフレーズは、フランジャーかコーラス等のエフェクターを使って、キーボードのようなサウンドを創り出している。エフェクターのセッティングとしては、スピード(レイト)を早めに、デプスを深めにする。◎のリフでは、ミュートする音としない音の区別をハッキ・しとさせ、リズミックに弾く。ギターIIでは、4小節目の○音をピッキング・ハーモニクスで出す。回でのツイン・ギターは、曲調に見事にマッチした独特のハモリになっている。□ではギターIのアルペジオをバックにギターIIのエフェクティヴなソロ(?)が聴けるが、実際

ライヴ等で演奏する場合は、アプローチを変えてみても面白い。キーボードはIntroでは符割りにこだわらず自由にプレイレよう。口の部分では嵐の音のような効果音が使われているので、ライヴ等で是非チャレンジして欲しい。ベースは8ビートでシンプルなラインだが、ダラダラレた一本調子の演奏にならないようにして、曲のメリハリを出そう。ドラムスはIntroに出てくるロールは効果音的なものなので、原曲をよく聴いて研究しよう。ドラム・バッドのようなもので代用するのもよい方法だろう。Intro 2 等では、ハイハットの代りにバスタムを使っている。回には前のスネアの連打は、段々と大きくしていくこと。リズムになる時の音の大きさを考えて、クレッシェンドするタイミングをコントロールできるようにして欲しい。







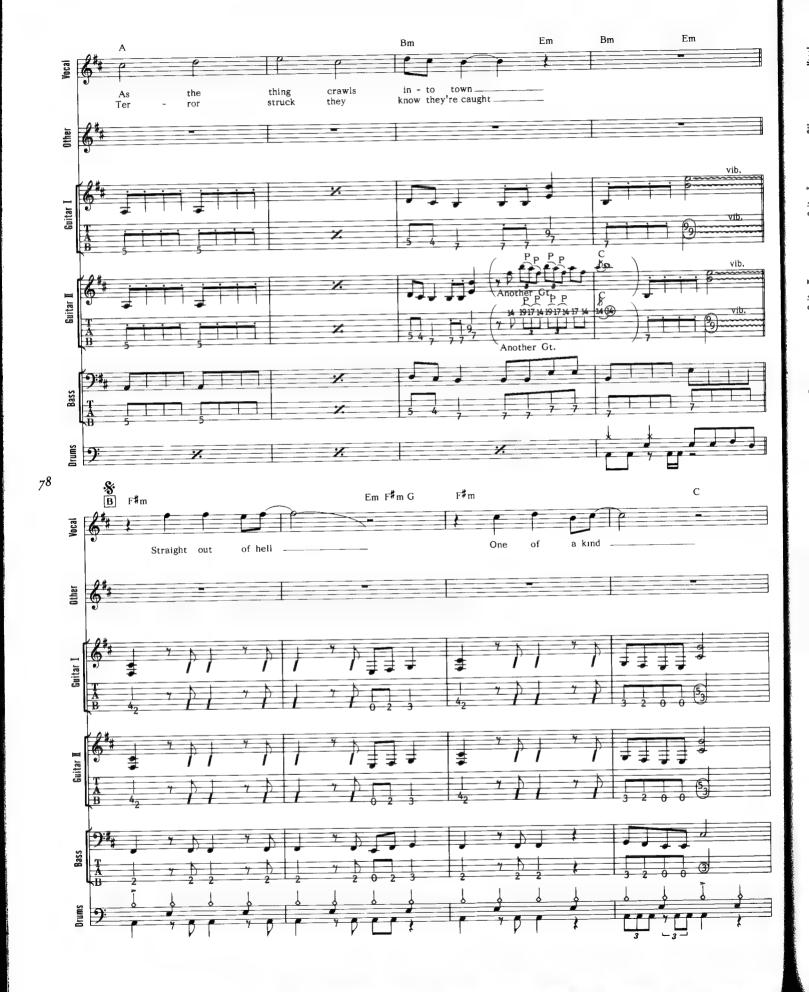
レよう。 ライヴ プルな

とし効パでア大で アスでき













Ħ

West Trong

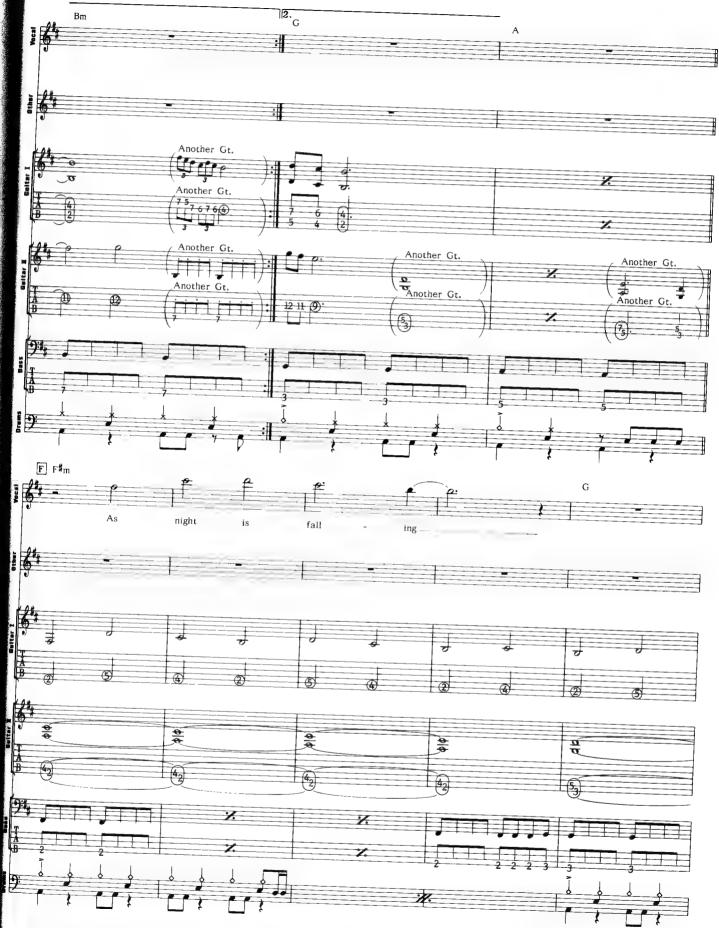
....













Guitar I

Vocal

Other

Guitar I

Bass

Drums

Vocal

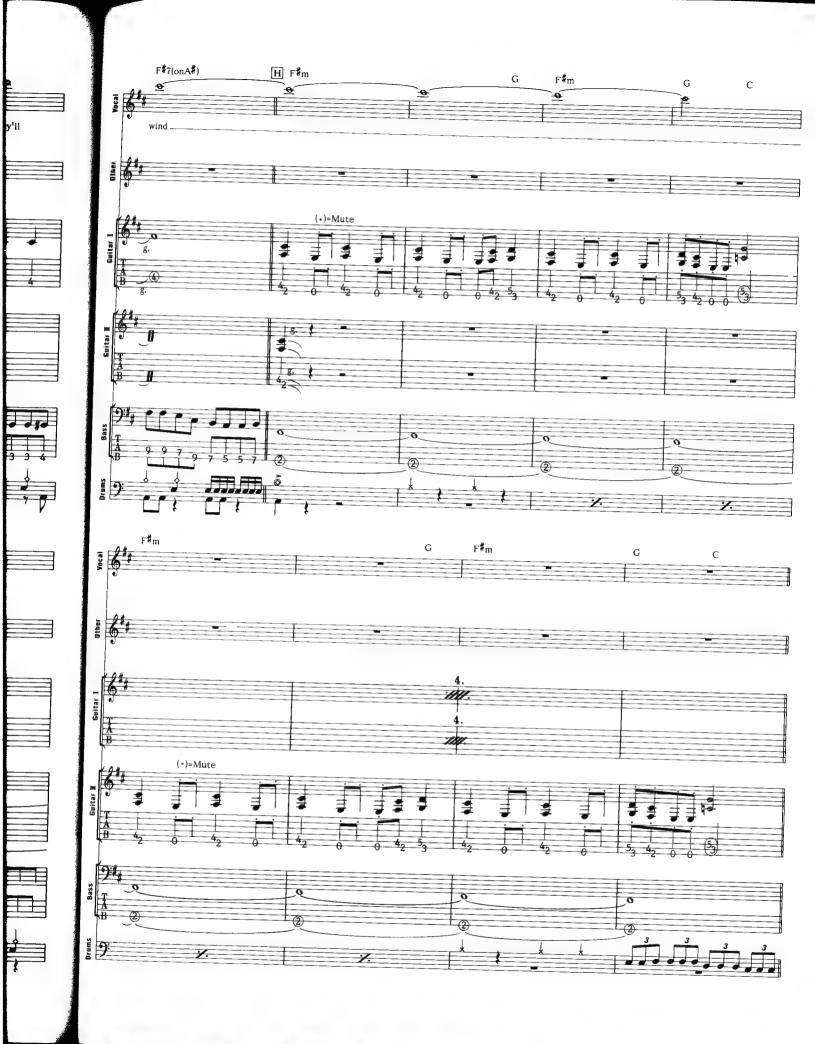
Other

I

Guitar

550

SMI.



























PAINKILLER

ペインキラー

Words & Music by G. Tipton, R. Halford and K.K. Downing

'90年代のヘヴィ・メタルへの新なる挑戦となった彼らの「ペイン・キラー」からのタイトル・ナンバー。ギターに関しては、Intro 3の6弦の開放に5弦の音をリズミックに絡めたリフと2小節目 G音のクォーター・チョーキングがポイント。 回をはじめ、このパターンのバリエーションが随所に出てくるので、しっかり覚えてあこう。 回からはミュートしながらの3連フレーズ。このテンボだと少しキツイが、正確に弾けるように。 回ではスウィープ・ピッキングでのプレイ。ピッキングは1拍ごとにアップだけ、ダウンだけで行う。ピックで弦をなでるように弾くのがポイント。 回の後半のソロではアームを2拍3連のリズムでダウンさせる。 回の9小節目では1音半のチョーキング。いつもより大きくチョーキングし、ゆったりとダウンさせるとよい。 回で1小節目からライト・ハンド奏法を使ったプレイがあるが、弦を飛びこえたりしているので注意すること。14小節目はトレモロ・ピッキングを

しながらのフレージング。②の7小節目はライト・ハンド奏法ではなく、プリング・オフ、ハンマリング・オンを使ったプレイ。3連に混じって16分があるので、リズムに注意して弾くこと。9小節目ではピッキング・ハーモニクスの応酬で盛り上げている。②の5小節目からは音を思いっきり伸ばす。ライヴ等ではフィード・バックさせて盛り上げてもよいだろう。ドラムスに関しては、この曲はツー・バスを最大限に使用しているので、ツー・バスもしくはツイン・ペダル等が必要だろう。ワン・バスでトライする時は、バスタムをバスドラと絡めて、ツー・バスの雰囲気を出す等の工夫をして欲しい。スピード感とパワーさえあれば十分に対応出来るハズ。あと、ハイハットのオープンは少なめに。ヴォーカルは音程が高いのでキツイとは思うが、声が細くならないように注意すること。



C. Copyright 1990 by CREWGLEN LTD. EBONYTREE LTD. GEARGATE LTD. EMI APRIL MUSIC, INC. Rights for Japan controlled by Shinko Music Publishing Co., Ltd., Tokyo Authorized for sale in Japan only











ides___ rough_ Vith ___





















þ



T.

:

Dage

Brume



SINT SINT SINT SINT







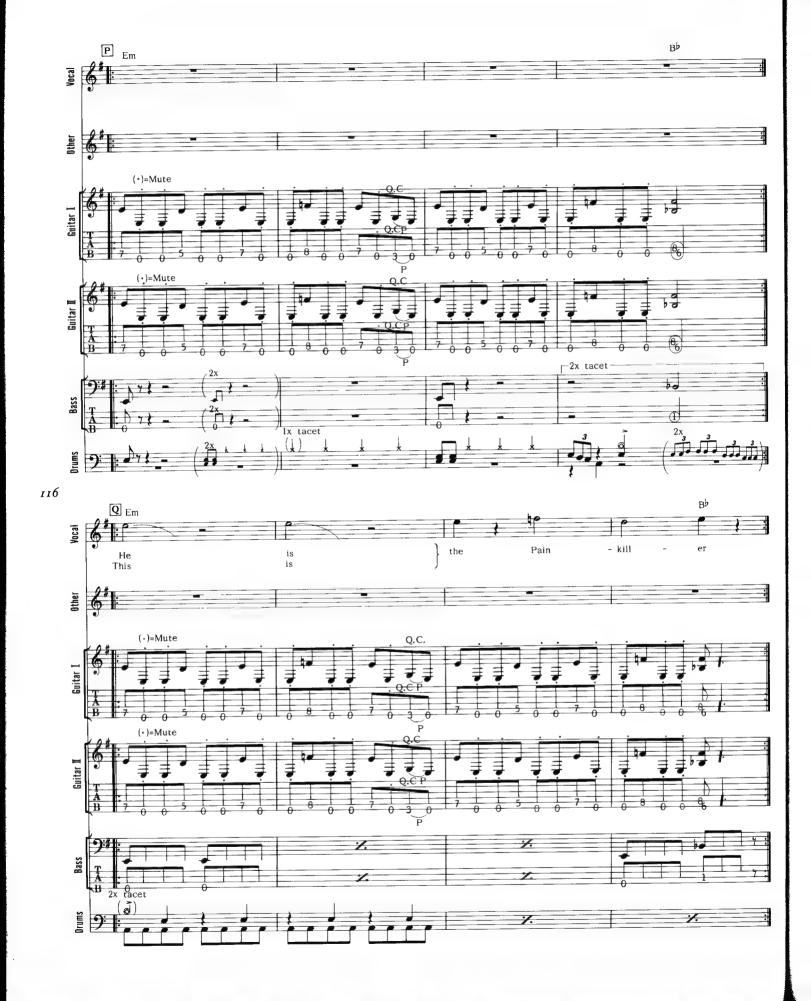
























THE SENTINEL

死の番人

Words & Music by G. Tipton, R. Halford and K.K. Downing

よりブリティッシュ的でヘヴィなサウンドだった『背徳の捉』からの人気ナンバー。ヴォーカルは少々音域が広く、高いのでキッイとは思うががんばって欲しい。ただ、声が出ないのに無理しているのだけは、聴いていてもツライので注意するように。ギターはこの曲では、テンポやKeyが変わったり、変拍子のキメがあったりと構成が凝ったものになっているので、部分ごとにチェックしていって欲しい。図の8小節目等のピッキング・ハーモニクスを含んだフレーズは、場所によってはピッキング・ハーモニクスが出たり出なかったりするので気をつけよう。図の2回目は、ダビングされた別のギターが重なってくる。余裕のある人や、キーボードのいるバンドはチャレンジしてみて欲しい。図の出だしからのライト・ハンド奏法は、フレーズが不規則なので注意すること。15小節目はトリル(ハンマリングとプリング・オフの連続)

しながらアームをダウンさせる。回ではスウィープ・ピッキング奏法でのフレーズが聴ける。左手はミュート気味にして、右手で弦を掃くように弾く。この場合では1拍ごとに右手をダウン&アップと繰り返す。ただ非常に難しいプレイなので、他の人のプレイ等もチェックしてしっかりと練習して欲しい。9小節目からは2本のギターのハモリによるフレーズ。ギタリストが2人いるバンドでは、是非ものにしておいてもらいたいプレイである。□のギターIのフレーズは、親指と人差し指でつまむようにして弾く。テンポに合わせたディレイをかければよい。音色はクリーンで。ドラムスは□のパートでは原曲を良く聴いて、空間をうまく使った壮大なイメージをうまく摑んで欲しい。キーボードだが、ストリングス系の音にチャイムの音も混ぜて出してみよう。



(C Copyright 1984 by CREWGLEN LTD. EBONYTREE LTD. GEARGATE LTD. EMI APRIL MUSIC, INC. Rights for Japan controlled by Shinko Music Publishing Co., Ltd., Tokyo Authorized for sale in Japan only





















D

Am

i - ron chal - lenged

-Mute

12. Em

-Mute-

bars.

tests _

 $\boxed{\mathbf{E}}$ Am

With

Have

<u>D</u>

fin-ished

N.C.

_ his

lives_

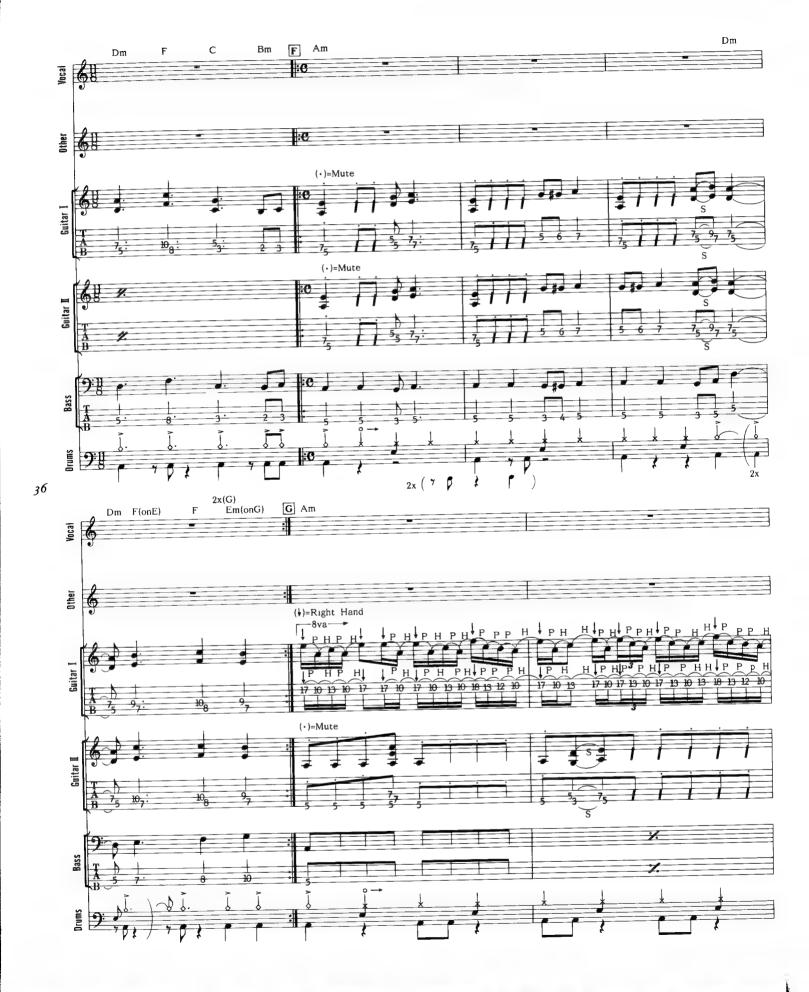
Another Gt.

man-y

fate_

Αm

C







THE LIMIT

自

























angle angle

YOU'VE GOT ANOTHER THING COMIN'

ユーヴ・ガット・アナザー・シング・カミング

Words & Music by G. Tipton, R. Halford and K.K. Downing

ジューダス・プリーストのライヴでのアンコール・ナンバーとなるこの曲。ギターは、全体的にハードなディストーション・サウンドではあるが口の部分ではクリアーな音で弾く。旧の部分のギター・ソロの3小節目では、チョーキングが遅くなったりして、3連のリズムがくずれないように気をつけたい。8小節目の16分音符のフレーズは、2拍目のアタマとウラでフレーズを区切ると分り易いだろう。旧の4小節目の2拍目のアタマは、シッカリとチョーキング・アップをしてから音を出すように。普通のチョーキングとチョーキング・アップの違いをハッキリと区別して指に覚え込ませておこう。7小節目からのフレーズではプリング・オフを多用し、チョーキング・アップも絡めたものになっている。 ロのアタマ2小節間で聴けるフレーズは、ギターのスイッチを使ったトリック奏法で、レス・ポール・モデル等のヴォリューム2

タイプのギターでないと出来ない(ストラト・キャスターは無理)ので注意。この場合、使っていない片方のピック・アップのヴォリュームを0にしておいて、音を伸ばしながらピック・アップのセレクター・スイッチをリズムにのせて動かす。奏法的には簡単だが実際ステージ等でやる場合、ヴォリュームが0になっているか入念にチェックをしておくこと。ドラムスは、ハイハットのオープンは軽く開けるだけで良い。回の部分ではリヴァーヴのかかったタムが3拍目に入り、田の5小節目からは、スネアのチューニングがどんどん下がっていくサウンドが聴ける。実際に再現するのは難しいので、ドラム・パッドのようなものや、キーボードがあるバンドでは、シンセサイザー等の音色で代用するのもよい。ヴォーカルは日からフェイクにもチャレンジしてみて欲しい。



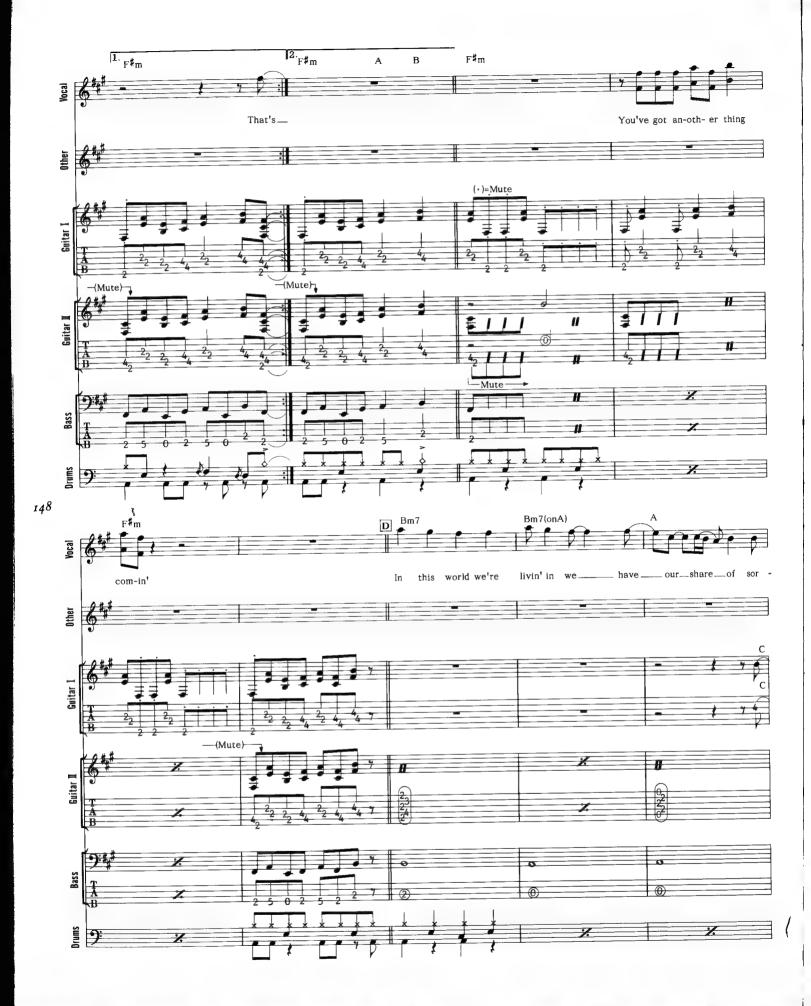
C Copyright 1982 by CREWGLEN LTD. EBONYTREE LTD. GEARGATE LTD. EMI APRIL MUSIC, INC. Rights for Japan controlled by Shinko Music Publishing Co., Ltd., Tokyo Authorized for sale in Japan only

















B(onF#)

D(onF#)

















